

足利義持と世阿弥

―世阿弥の新資料報告―

松岡 心平

今春から有志の方々と『看聞日記』の輪読を始めているが、日記の応永二十三年(一四一六)九月の輪読会に際して、関連する『大日本史料』をながめていたところ、たまたま世阿弥の新資料とおぼしき記事を見つけたので、とりあえずここに報告しておきたいと思う。

それは將軍足利義持のはじめての春日社参詣に関連する記事の中に見えるが、まずは『看聞日記』の当該記事を取り上げてみよう。

十一日、朝陰、晴晴、室町殿南都下向、今日春日社被参、行粧晴儀也、供奉人著淨衣、公卿広橋大納言・日野中納言・裏松中納言、殿上人雅清朝臣・資雅朝臣・義資朝臣・経興・量光・宣光云々、兼日教興朝臣雖加御点、夜前俄被留了、用意之処不参、殊計会云々、時宜不快也
十六日、晴、室町殿自南都被下向、供奉人著狩衣、色々織物、刷行粧、諸大名管領・勘解由小路武衛・畠山・一色侍所・山名以下参、警固武士数百人召具、御逗留之

間、一乗院・大乘院・仏地院・惣林院・尊勝院・梨原六ヶ所詔請申、当代晴社参初度之間、寺門経営延年・猿楽等、尽興賞翫申云々(下略)

『看聞日記』では、足利義持の南都下向の際に催された猿楽については、九月十六日の条で「寺門経営延年・猿楽等、尽興賞翫申云々」と簡単にふれるのみである。これに対して、『大日本史料』所引の「狩野亨吉氏蒐集文書」では、義持の下向の日程が記され、その中に「観世三郎」の名が見えるのである。ちなみに左に掲出する同書の記事は、京都大学文学部所蔵の原本の影写本(東京大学史料編纂所蔵)に拠っている。

応永廿三年九月十一日、為御参詣春日社以下□□御浄衣御興也、供奉人公卿三人、殿上人六人、衛府□□

十二日、御社参、御入堂、先春日社、次八幡□□華堂、次大仏殿、次渡御尊勝院、有□□入夜延年

十三日、終日猿楽、観世三郎

十四日、大乘院渡御、猿楽
十五日、松林院・仏地院渡御、夜延年□□
十六日、還御

十三日の条に「終日猿楽、観世三郎」とある。観世三郎となると、世阿弥の甥元重の可能性もあるが、この年弱冠十九歳にすぎず、この三郎は世阿弥と見てまちがいないだろう。

なお、『大日本史料』所引の「狩野亨吉氏蒐集文書」を史料編纂所で調査したところ、この文書の前にもう一つ関連文書があることがわかった。

こちらの方は、東大寺のさる院家の記録らしく、義持の行事日程がさらに詳しく記されている。

□都御参詣(応永廿三年九月十一日)

□乗院着御之夜有延年

□辰刻御社参御入堂任先例

□次八幡宮次法華堂也

□為後門執金剛神御

□云々次二月堂此者実

□尚勸請生身十一面観

□像也次大鐘御拜見其後

□殿次南中門二天御拜見

□還御次渡御尊勝院即

□明宝蔵 勅使着座次

□一乘院田楽在之十三日例日

□終日猿楽有之十四日直

還御之後

□ 乗院有猿楽十五日渡御松

□ 院御李原次仏地院

□ 御其夜有延年十六日御上洛

この日程記事のあとには、義持への諸門跡諸院家の進物リストが記される。興福寺、一乗院、大乘院、仏地院、松林院の進物が記され、東大寺、尊勝院、東南院、西室、普門院と書かれてきて「当院者雜紙三百束胡銅大花瓶一對香炉」となっており（最後に大勧進の進物が記される）、当院が東大寺の右記以外の院家であり、しかも尊勝院の百貫文以上の進物にくらべてみると弱小の院家であることが想像できよう。

ともあれこの東大寺某院の記録によれば、十三日の条は「例日終日猿楽有之」とある。十三日が例日すなわち赤口日(凶日)なので、公式行事はなく、一日中猿楽が催されたことがわかる。その主役が観世三郎こと世阿弥であった。

このような「終日猿楽」の先例は、足利義満の応永元年(一一三九四)三月の南都下向に求めることができる。このときも十三日が例日で、『大日本史料』所引「春日御詣記」によれば、「同十三日、依為例日無何事、但為官符衆徒沙汰、猿楽観世三郎有之」とある。この日義満の宿所一乗院で官符衆徒により観世三郎(世阿弥)を主役とする猿楽が催され

たが、応永二十三年の義持のときも『看聞日記』に「寺門経営」とあることからして、同じく官符衆徒によって観世三郎を主役とする猿楽が催された可能性が強い。もちろん場所は、義持の宿所一乗院だろう。

応永二十三年の義持の南都下向はおおむね義満の至徳二年(一一三八五)の南都下向を先例とあおいでいるが、至徳二年には余興は延年しか行なわれていない。猿楽の余興の先例は応永元年のそれにくらべたのかもしれない。

義持の南都下向の回数、父義満と比べ少ない。輪読会の九月担当の家永遵嗣氏によれば、義持は北野信仰が濃厚で石清水八幡宮に對する意識も強いが、南都北嶺対策の意識は比較的希薄であり、実施されている日吉・春日参詣には政治的背景が想定できる、とのことである。応永二十三年の下向は自身の発願による大仏修理にからんでの行動だが、『看聞日記』の同年九月十六日の条によれば供奉の公卿広橋兼宣(大納言)を吉野に派遣して後龜山の還幸を促しており、南朝対策の含みの強い参詣であったようだ。

ところで東大寺某院の記録では十二日の夜に一乗院で田楽が催されている。増阿弥の出演によるものだろう。というのは、翌年も義持は大仏修理の完成ということで南都へ下っており、『満濟准后日記』応永二十四年八月

二十六日条によれば、そのときは一乗院で一日中、増阿弥の田楽を見ているからである。

前日の二十五日には一乗院で四座猿楽の立合が催されているが、世阿弥の名前は特記されておらず、主役というわけではなさそうだが、応永二十四年の下向は内々のものであるだけに、將軍の意向が強く反映したのか、演芸の主役は増阿弥であつたらしい。

こうしてみると応永二十三、四年頃の世阿弥と増阿弥の力関係はかなり微妙なところがあるようだ。それはともかくこの資料の出現により、義持の時代に世阿弥が冷たくあしらわれていたという通俗説の訂正がさらに強く求められる、ということだけはまちがいのないところだろう。

輪読会のメンバーでもある東京大学史料編纂所の末柄豊氏には、資料閲覧の便宜をはかっていただいた上、種々御教示をいただいた。末筆ながら厚く感謝申し上げます。

(東京大学助教授)